世界にひとつの双葉の学校

■目指す学校像と学校施設の姿　報告書 3-1

基本構想でまとめた4つの「目指す学校像」を実現する学校施設の姿を示す。

わたしの学校

今日ずっといたい、明日また来たい自分の居場所と思える学校
- 発見や工夫のできる遊び場がある
- 学習材が整い、自分のペースで学べる
- 一人ひとりが心地良く過ごしやすい
- 自分の学びに取り組める広い場所/気持ちが落ち着く小さな場所
- 子どもと大人が触れ合える

学習、運動、活動、興味のあることが見つかり、好きなだけ取り組める学校
- 実習や実技、表現活動が充実し、好きなことに出会える
- 教科横断的な学びの取り組みができる
- 自然体験で感性を育み、存分に運動できる
- 町民と一緒に様々なスポーツにチャレンジできる

この学校が自慢だ、あの学校で学びたいと思えるプラウド・スクール
- 双葉町の新たなシンボルとなる建築デザイン
- 木材を活用し、子どもたちや利用者を温かく包む

みんなの学校

明日またみんなに会える幸せが感じられる学校
- 活動に応じた環境を自ら選び、協働的に学べる
- 寛いだり交流したりできる居心地の良いコモン(共有)スペース
- 町民も思い思いに過ごしたり、交流したりできる

多様な教育的ニーズのある子どもを取り残さないインクルーシブ・スクール
- 様々な人が、共に学び、活動し、育つことができる
- 気兼ねなく安心して使えるトイレ等の生活空間や移動空間がある
- わかりやすいサイン等のデザイン

地域ぐるみで子どもたちの学びと成長を支えるコミュニティ・スクール
- 安全・安心な建物配置、人々を温かく迎えるアプローチ
- 学校図書館、体育館、特別教室、校庭等は、地域と共用できる
- 地域コーディネーターと保護者や町民、NPO等と協働できる

つながる学校

学校中のどこでも誰とでも学べ、交流できる学校
- こども園と義務教育学校の教職員が、共に研究・探究できる
- 地域に開かれ、連携・協働し、授業改善ができる
- さまざまな活動の様子がお互いに見える
- 生涯を通して学べ、世代を超えたつながりや共感が育まれる
- 双葉町の伝統芸能や文化を復活、継承し、ふるさとの復興に資する

学校を飛び出し、社会や世界へ学びが広がるグローバル・スクール
- 他の地域や国とオンラインで臨場感を持ってつながる
- 言語や文化が異なる子どもたちと共に育つ
- 様々な文化を共に体験し、多文化共生を実現できる

DXにより時間や距離の制約を超えて個と協働の学びを実現する学校
- 教育活動や校務等でデジタルテクノロジーを利用できる
- デジタルテクノロジーにより、町民が利用しやすい地域の拠点づくり

そなえる学校

子どもたち、地域の安全・安心を支える、災害に強いレジリエント・スクール
- 避難所機能を共創スペースに重ね、施設の使用方法を共有する
- 地域の気候風土を踏まえ、心地良く快適に過ごせる
- 自然エネルギーの活用により、環境負荷を低減し、自然との共生を図る
- 断熱化など建築環境性能を高める

人口や子どもの数の増減、教育の変化に柔軟に対応できる学校
- ゆとりがあり多機能な保育/教育空間
- 日常的な維持管理や定期的な設備等の更新が行いやすい

セキュリティが確保され、いつでも自由に利用できるセーフ・スクール
- 視認性、識別性、領域性など総合的に防犯性能を高める
- 防犯性と安全性を高めた街路のデザイン
- 防犯意識を高め合えるコミュニティが育まれる

＜カリキュラムの方向性＞

報告書 3-2

双葉町が目指す国際人の育成に向けて

グローバル・シチズンシップ
幼少期からの外国語(英語)活動
世界につながる異文化体験

これら３つの柱に基づいて
世界の多様な人々との交流を通し
コミュニケーション能力の素地を養うとともに
国際感覚を身に付け
多文化共生を核とした
新しいこども園・学校を目指す

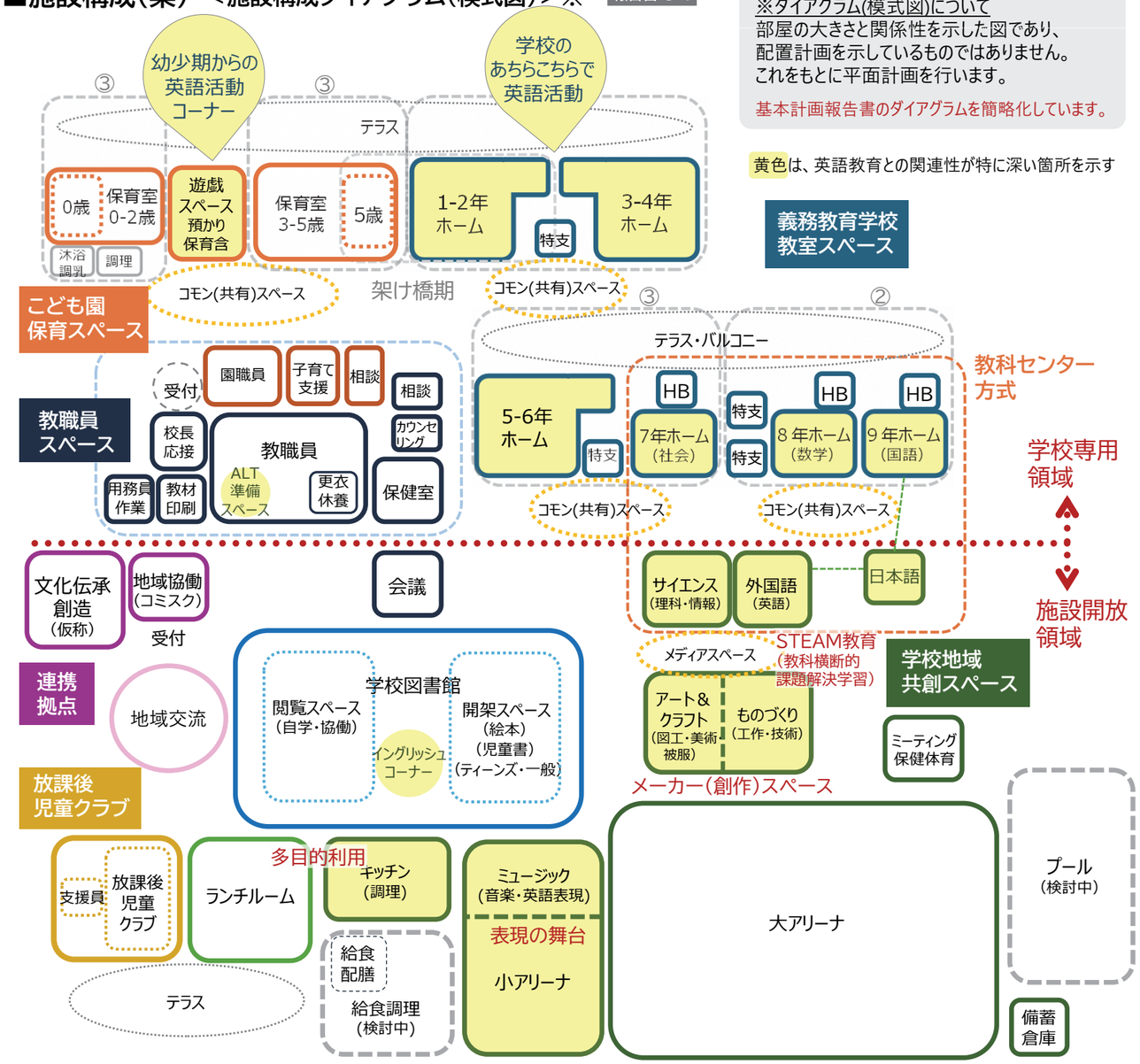
ALTによる園児との英語活動(幼稚園)

双葉町生徒海外(英国)派遣事業

■施設構成（案）＜施設構成ダイアグラム（模式図）＞※　報告書 5-1

※ダイアグラム(模式図)について
部屋の大きさと関係性を示した図であり、
配置計画を示しているものではありません。
これをもとに平面計画を行います。
基本計画報告書のダイアグラムを簡略化しています。

黄色は、英語教育との関連性が特に深い箇所を示す



新しい学校施設を活かした多様な外国語（英語）活動

- こども園保育スペースでは、遊戯スペース等で、幼少期から外国語（英語）に親しむ活動や遊びができる。
- 義務教育学校スペースでは、外国語（英語）の教室や国語の教室で充実した言語教育が行える。また海外から訪れる子どもたちは日本語教室で個別に日本語を学ぶことができる。
- 学校地域共創スペースでは、特別教室で外国語（英語）を使って実習したり、表現の舞台で外国語（英語）の劇や発表をしたりできる。
- 図書館のイングリッシュコーナーでは、英国等の文化や交流活動の情報発信ができる。
- 教職員スペースでは、複数のALTや日本語指導助手と協力し、外国語（英語）活動の授業準備や指導案の作成等ができる。

施設構成の考え方

- 学校専用と共創（施設開放・地域連携）にスペースを分ける。完全な分離ではなく、学校専用から共創スペースには移動でき、活動の様子が把握できるようにする。
- こども園と義務教育学校の教職員スペースは教職員が日常的に協働しやすいようにまとまりを持たせて配置する。
- 保育室や教室は学年の区切りを設定し、成長段階に応じてその環境を変える。教科担任制となる義務教育後期段階は教科センター方式の採用を可能とする。
- 学校と地域利用者の玄関を別に設け、利用者が識別できるようにする。
- 学校施設は地域の指定避難所としても利用できるようにする。

＜計画面積＞　報告書 4-3

学年単位:最大20名の想定

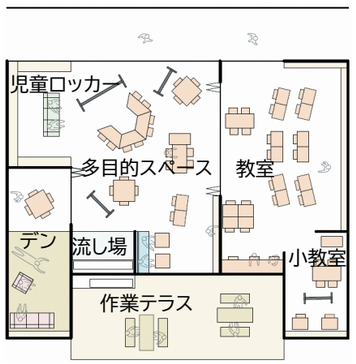
認定こども園園舎	800㎡
義務教育学校校舎	4,000㎡
義務教育学校屋内運動場	1,800㎡
プール施設（検討中）	600㎡
給食調理施設（検討中）	300㎡
放課後児童クラブ	200㎡
合計	7,700㎡

世界にひとつの双葉の学校

■各室・スペースの計画　報告書 5-2

教室まわり

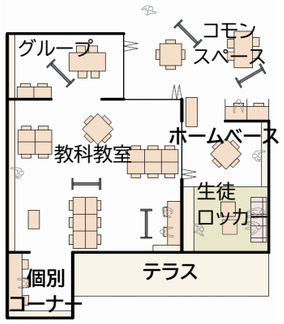
- 成長の節目を考慮し、縦のつながりによる帰属集団を「学年の区切り」として設定し、保育室や教室、特別支援教室のまとまりをつくる。
- 学年の区切りに合わせてトイレや流し場、更衣室などの生活スペースを配置する。
- 学年の区切りに応じて教室まわりの設えを変えることで、成長が実感できる施設環境とするとともに、コモンスペースやテラスなどの屋外空間を組み合わせる。また教室同士や教室と特別支援教室を直接つなげることで、年齢、学年の人数、子どもたちの状態に応じて柔軟に利用できるようにする。
- 教科担任制となる後期以降は教科センター方式を検討する。その場合、教科教室専用の教育空間を整え、教育空間とは別に生徒の生活拠点となるホームベースを設ける。
- 教室空間は大中小の空間を組み合わせた構成とすることで、それぞれの空間特性を生かした環境づくりが行えるようにする。



＜小学部・教室と多目的スペースのあるホームの例＞

前期の2学年合わせたホーム
最大40人

- 教室と多目的スペースは一体的に利用できる
- コーナーに小教室を設け、個別対応できる
- 多目的スペースの隣にデン（ほら穴のような小空間）を設け、カームダウン（気持ちを落ち着かせる）の場とする
- 児童の持ち物は2学年でまとめてロッカーコーナーに保管する



＜中学部・教科教室の例＞

後期の1学年のホーム
最大20人

- 教科教室とホームベースを組み合わせて学年の拠点をつくる
- 個別対応などが行いやすいコーナーを用意する
- 教室とホームベースを直接つなげ、一体的にも利用する

- こども園と義務教育学校前期段階の保育室・教室は外部空間とのつながりを大切に捉え、1階に配置することを原則とする。内と外の間に半屋外テラスを設けて室内と段差のない連続した保育・教育スペースとする。

保育室と連続したテラス

テラスには流し台を設ける

学校図書館

- 地域開放利用に足る学校図書館として充実を図り、一般書を含めて3万冊程度の蔵書冊数が開架で閲覧できるようにする。
- 絵本・児童書、ティーンズ、一般書の開架書架スペースを設け、多様な人々が利用しやすいようにする。
- 無線LANや電源等を適所に整え、デジタル端末と一般書籍の両方に親しめるハイブリッドな図書スペースとする。
- 司書を常駐させることを検討するとともに、貸し出しや排架、レファレンス（調べもの相談）サービスを提供できるサービスカウンターを設ける。
- 閉架書庫を用意し、開架スペースの図書環境を常に良好な状態に整えられるようにする。

特別教室

- 教科の枠組みを超え、子どもたちが自ら創意工夫ある実験・実習に取り組めるように特別教室を再構成する。
- 子どもたちが学習の狙いや教科等の魅力を感じられるようにする。
- 特別教室は地域開放が行いやすいように配置や仕様を工夫する。地域活動に応えられる施設設備を用意する。

さまざまな創作活動ができるものづくり工房

- 子どもたちの放課後活動の場としても利用する。
- 多様な人々が利用するための安全性を確保するために、十分な視認性を確保し、内外から活動の様子が分かりやすいようにする。

屋外教育環境

- 校地の広さを活かし、多様な遊びや栽培、飼育活動が行えるようにする。
- 土や水、樹木等の自然環境に直接触れ、自然と一体となって遊べる園庭、遊び場を設ける。
- 自ら遊びを工夫したり、チャレンジしたりできる場、遊具を設ける。
- 生命のすごさや食物の大切さを体験できる菜園や観察園、動物飼育スペースを設ける。

起伏を活かした屋外環境づくり

地域連携スペース

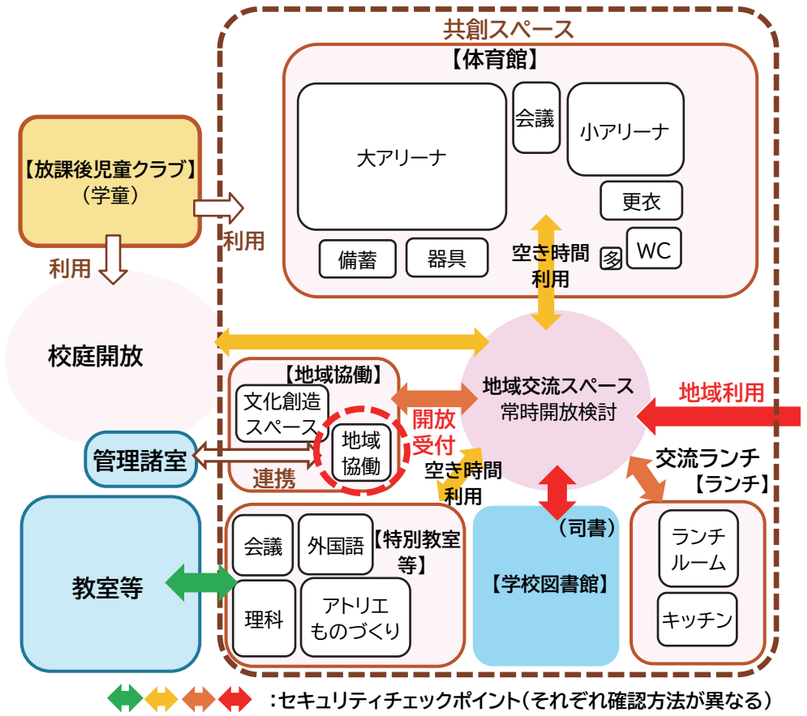
- 地域と学校がつながり、協力して保育や教育ができる場づくりを行う。
- 今後以下のスペースを検討する。
  地域協働：地域と学校の協働、コミュニティスクールの拠点となり、受付機能をもつ。
  まち交流：地域の人々が気軽に訪れ交流、イベント会場ともなる。
  文化伝承・創造：双葉町の伝統芸能や日本文化を活かせる活動の場。

地域の伝統芸能を継承するホール

■地域と学校の共創空間　報告書 5-3

- 学校専用スペースと共創スペースをゾーニングで分け、その間の出入りを管理できるようにする。児童生徒は自由に移動できるようにし、開放利用者は専用スペースに入れないようにする。
- 放課後児童クラブは共創スペースのゾーンに配置し、放課後や休日に活用できるようにする。
- デジタル技術を活用し、施設予約の簡略化、予約状況の可視化等のシステム構築も検討する。
- 施錠・開錠の電子化や、遠隔制御システムの導入などにより開放管理の省力化を図る。

＜共創スペースの安全配慮ダイアグラム＞



■避難所計画　報告書 5-4

共創スペースに避難所機能を重ね、多様な避難者を受け入れられる安全・安心かつQOL（生活の質）が確保できる避難所とする。学校専用スペースとゾーンが分けられているので学校の早期再開をしやすい。

■地球環境との共生とサステナブルデザイン　報告書 5-5

- 長寿命化を図り、「100年使い続けられる」施設を目指す。
- 高気密・高断熱を施し、施設の基本的な環境性能を高める。
- 省エネ設備を導入するなどして省エネ化を図り、ZEB Readyを目指す。
  （ZEB Ready:ゼロエネルギー建築の実現に向けた基準を満たすことを示す認定制度）
- エコスクールとして、省エネの運用と効果が分かり、環境教育に活かせるようにする。

■教育DXと施設計画　報告書 5-6

将来の発展性を備えた基幹ネットワークを構築し、教育のデジタル環境整備に留まらず、施設管理や防犯対策、地域開放、省エネ対策など多岐に渡りICT/IoTを積極的に活かせる環境整備を目指すことが求められる。